九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

宇木汲田貝塚 : 1966・1984年発掘調査の再整理調査報告書

宮本, 一夫
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

松本, 圭太
九州大学大学院人文科学研究院 : 学術研究員

高宮, 広土
鹿児島大学総合科学域総合研究学系 : 教授

上條, 信彦
弘前大学人文社会科学部 : 教授

他

https://hdl.handle.net/2324/4372000

出版情報：2021-03-25. 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

第２章　宇木汲田貝塚の再整理調査の経緯と目的

宮本一夫

１．宇木汲田貝塚の調査

宇木汲田貝塚は、第１章でも述べたように、宇木汲田遺跡の東北端に位置している（巻首図版１－１、図版１）。旧地形でいえば、瀬戸口支石墓や森田支石墓が位置する丘陵部が、宇木汲田貝塚の方向に延び、その丘陵端部の落ち際のところに、貝層が堆積していた。

1930年に耕地整理中に貝塚が発見され、松浦史談会が1930年に第１回、1938年に第２回と第３回の発掘調査を実施している。

1966年には、前年度の1965年の試掘調査を踏まえ、九州大学とフランス極東学院による日仏合同調査によって、宇木汲田貝塚の本調査がなされた。この調査によって、夜臼式単純貝層中から炭化米が発見され、夜臼式期における稲作の存在が明らかとなった。

1984年には、横山浩一を研究代表とする文部省科学研究費総合研究Ａ「北部九州における弥生文化の成立」によって、宇木汲田貝塚の再調査が行われた。1966年調査によって明らかとなった夜臼式単純層について、詳細なブロック単位での貝塚層の分層発掘を試み、夜臼式という縄文から弥生への移行期に、稲作農耕がどのように取り入れられていくかを明らかにしようとした。そこで、土器・石器という人工遺物の検討のみならず、貝塚に含まれる自然遺物を含めた総合的な研究が意図された。これにより夜臼式単純期のⅧ～Ⅺ層を分層するとともに、Ⅸ・Ⅹ層で炭化米を含めた大量の自然遺物を得ることができた。しかしながら、それらの調査成果は概報の報告と土器の分析にとどまり（田崎1986、藤尾（編）1987、横山・藤尾1986）、自然遺物を含めた総合的な評価はなされないままであった。

表１　炭化米の放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-170355	1（No.5）	宇木汲田遺跡　F-8-c 区 層位：Xa-10-17	炭化米	AaA	−23.01 ± 0.29	2,700 ± 20	71.50 ± 0.19
IAAA-170356	2（No.9）	宇木汲田遺跡　G-8-c・G-9-d 区 層位：Xa-9-67・Xa-9-70	炭化米	AaA	−25.92 ± 0.27	2,640 ± 20	71.99 ± 0.20
IAAA-170357	3（No.27）	宇木汲田遺跡　F-8-c・d ？区　層位：IXa-4-17	炭化米	AaA	−21.08 ± 0.25	2,710 ± 20	71.37 ± 0.20
IAAA-171860	12（No.2）	宇木汲田遺跡　F-8-d 区　Ⅸ a-3層	炭化米	AaA	−22.55 ± 0.25	2,680 ± 20	71.62 ± 0.20

表２　炭化米の放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 未補正値、暦年較正用^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-170355	2,660 ± 20	71.79 ± 0.18	2,695 ± 21	892calBC-878calBC（13.6%） 846calBC-811calBC（54.6%）	896calBC-809calBC（95.4%）
IAAA-170356	2,660 ± 20	71.85 ± 0.20	2,640 ± 22	816calBC-798calBC（68.2%）	830calBC-794calBC（95.4%）
IAAA-170357	2,650 ± 20	71.94 ± 0.20	2,709 ± 22	895calBC-867calBC（29.6%） 855calBC-823calBC（38.6%）	902calBC-813calBC（95.4%）
IAAA-171860	2,640 ± 20	71.98 ± 0.20	2,681 ± 22	841calBC-806calBC（68.2%）	895calBC-803calBC（95.4%）

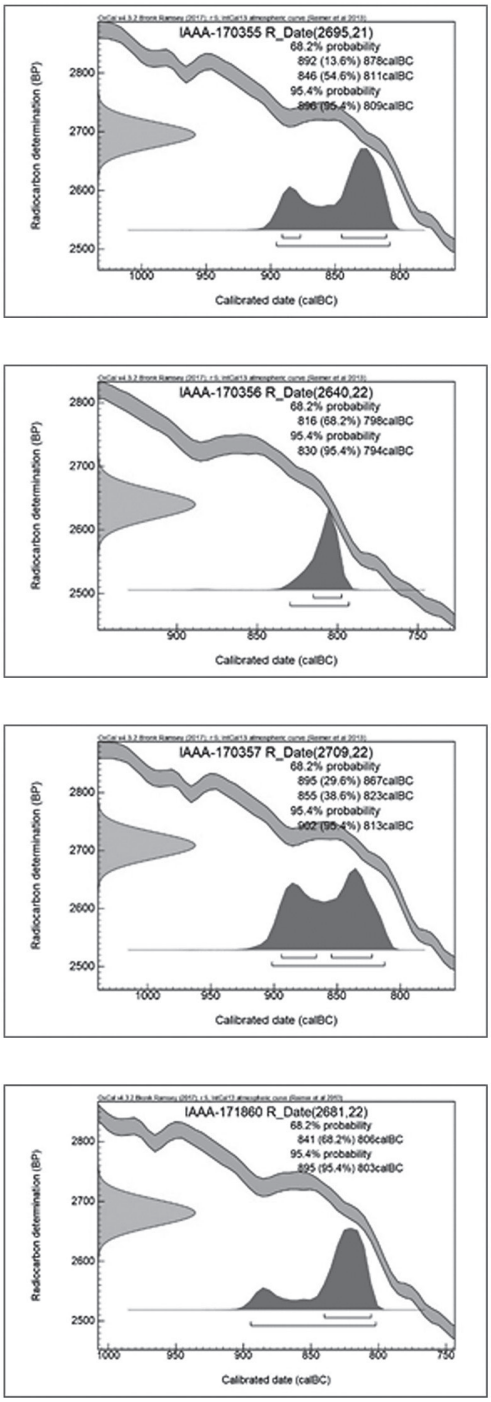

図９　宇木汲田貝塚出土炭化米の較正年代

２．貝塚土層のフローテーション分析

1984年調査では、貝塚の細かい分層と貝層のブロックサンプリング行われていたが、大量の未整理の土壌試料（土嚢袋53袋）が九州大学考古学研究室に残されたままとなっていた。2018年に箱崎キャンパスから伊都キャンパスへの移転を控え、これらの土壌試料を整理する必要が生じた。そのため、九州大学考古学研究室の学生とともに2016年から約２年間をかけて土壌試料のフローテーションを行い、植物遺存体や動物遺存体の採集を行った。これらの土壌試料は、夜臼式単純層の貝層部分であるⅩa・Ⅸa 層部分に限られ、そこから炭化米651粒を発見するに至った（上條・小泉2019）。植物遺体については松崎哲也・菊地大樹（奈良文化財研究所）に、植物種子については高宮広土（鹿児島大学）に、炭化米の計測分析については上條信彦（弘前大学）に、炭化米の DNA 分析については田中克己（弘前大学）に、土器圧痕分析は小畑弘巳（熊本大学）に依頼した。この中で、炭化米の計測分析（上條・小泉2019）と炭化米の DNA 分析（田中2019）については、既に結果を公表している。また、土器圧痕分析では、残念ながら種子圧痕は発見されなかった。

３．炭化米と土器付着炭化物の年代

フローテーション分析によって発見された炭化米651粒のうち、Ⅹa 層から２点、Ⅸa 層から２点の炭化米の放射性炭素年代を（株）加速器分析研究所で計測したところ、表１・２や図９に示すような年代測定値を得ることができた（宮本2018）。Ｆ８区のⅩa 層の炭化米（IAAA-170355）は846calBC-811calBC（54.6％）、Ｇ８・９区のⅩa 層の炭化米（IAAA-170356）は816calBC-798calBC（68.2％）、Ｆ８区のⅨa 層の炭化米（IAAA-170357）は855calBC-823calBC（38.6％）、Ｆ８区Ⅸa 層の炭化米（IAAA-171860）は841calBC-806calBC という測定結果（Ｉσ）である。ほぼ紀元前９世紀後半の年代で一致している。これらが比較的均一な値を示すことから、統計的な処理の結果、同一値としてＩσで832calBC-812calBC（68.2％）、２σで842calBC-806calBC（92.3％）という較正年代値が示された（宮本2018）。

さらに、炭化米の出土情況や層位的な数量などから、Ⅸa層の炭化米は本来Ⅹa 層に堆積していたものが、Ⅸ層堆積時に巻き上げられたものであり、炭化米は本来Ⅹ層のものと考えた（宮本2018）。さらに概報に示された出土土器の検討から、Ⅹ層が夜臼Ⅰ式と考え、Ⅸ層は夜臼Ⅱ式に相当するが出

表３　推定される較正年代（cal BC 表記）

資料名	較正年代（1SD）	較正年代（2SD）	注記
LF-9_F-8-d_ イネ科雑草	992（ 2.0%）990 cal BC 980（66.2%）916 cal BC	1016（95.0%）895 cal BC 863（ 0.4%）858 cal BC	
LF-9_F-8-d_ アワ	897（68.2%）837 cal BC	921（95.4%）814 cal BC	微量測定 0.16 mgC
LF-9_F-8-d_ キビ	895（68.2%）834 cal BC	915（95.4%）814 cal BC	微量測定 0.18 mgC
LF-14_G-8-c_ アワ	894（27.0%）868 cal BC 854（41.2%）819 cal BC	904（95.4%）810 cal BC	微量測定 0.15 mgC

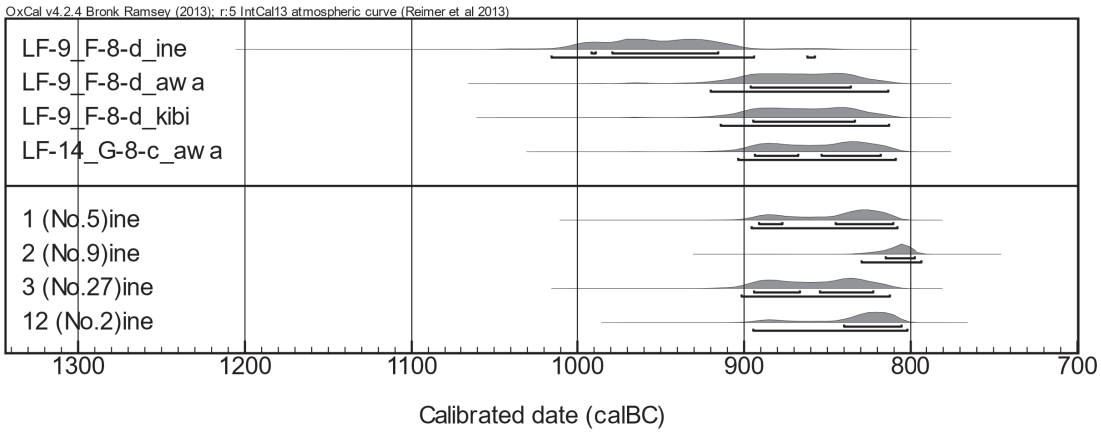

図10　測定したイネ科雑草（ine）・雑穀（awa と kibi）の較正年代（上段）とイネ（宮本 2018）の較正年代（下段）の比較

土する土器は夜臼Ⅰ式と夜臼Ⅱ式が混在すると考えた。また、J・K−５・６区のⅨb 層出土の夜臼Ⅱ式の刻目突帯文土器深鉢（図35－135）における内面付着炭化物の放射性炭素年代を、（株）加速器分析研究所で測定したところ、642calBC-587calBC（32.7％）（１σ）、695calBC-541calBC（79.2％）（2σ）であった（宮本2018）。土器内面の付着炭化物であるところから、焼成時の古木効果などの汚染を受けていないと考えられる年代である。以上の結果や、これまでの土器付着炭化物の放射性炭素年代と土器型式の再検討ならびに板付Ⅰ式の実年代の検討から、夜臼Ⅰ式が紀元前９～８世紀、夜臼Ⅱ式が紀元前７～６世紀と考えた（宮本2018）。

さらに、F８区ｄのXa 層のイネ科植物１点、キビ３点、アワ２点とG８区ｃのXa 層出土のアワ３点の放射性炭素年代が東京大学総合研究博物館の米田穣らによって行われた（米田ほか2019）。その結果は表３や図10に示すように、ほぼ紀元前９世紀にすべての試料の年代が収まり、炭化米の年代測定値とほぼ同じ年代を示した。

４．再整理調査の目的

このように日本列島最古の炭化米やアワ・キビが検出されたことにより、これらの所属するX層の時期が問題となる。既に示したように、概報による土器の層位的な出土傾向から各層の土器型式を認定し、炭化米の所属年代を決定し、炭化米の年代を以て所属土器型式の年代を決定したところである（宮本2018）。こうした年代決定においては、これまでの宇木汲田貝塚での調査によるすべての資料の検討が必要である。そこで、1966年調査ならびに1984年調査の全資料を対象に、夜臼式から板付Ⅱ式までの土器・石器ならびに自然遺物の検討を行うこととした。これにより、既に炭化米の年代決定を

行ったプロセスを再確認するとともに、1984年以来の調査目的であった貝塚という遺跡の性格に基づいて、稲作を含めた生業のあり方を自然遺物の分析とともに再検討することを目的とした。さらに縄文から弥生という狩猟採集社会から農耕社会への移行期にあって、貝塚という豊富な自然遺物をもつ資料情報から生業の復元とともに社会生活の復元を目指す。そのことが、改めて縄文から弥生への生業転換の実態を明らかにできるものと考えられる。すなわち、朝鮮半島南部の無文土器文化やそれを携えた渡来人たちの影響や接触によって、狩猟採集社会の縄文文化が稲作農耕社会の弥生文化に転換したと考えられるが（宮本2017）、その転換の実態を生業部分から明らかにしたいと考えたのである。ただ残念なことには、板付Ⅰ・Ⅱ式が出土するⅥ層におけるブロックサンプリングなどの土壌試料が存在せず、弥生前期の貝類や炭化種子などの自然遺物の検討ができなかった。弥生早期のⅩ・Ⅸ層と弥生前期のⅥ層との自然遺物の比較検討ができなかったのである。すなわち、夜臼単純層という弥生早期と板付Ⅰ・Ⅱ式という弥生前期における生業変化が存在するか否かについては、検討できなかった。また、縄文から弥生への移行期の解明に調査目的を置いたところから、Ⅲ・Ⅳ層に認められる弥生中期の土器などの文化遺物の検討は行わなかった。

参考文献

上條信彦・小泉翔太2019「宇木汲田貝塚出土米の粒形質分析」『東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究』九州大学人文科学研究院、124-144頁

田崎博之1986「唐津市宇木汲田遺跡における1984年度の発掘調査」『九州文化史研究所紀要』第31号、１-58頁

田中克典2019「宇木汲田遺跡および有田遺跡から出土したイネ種子の DNA 分析に基づく弥生早期の北九州に伝播したイネタイプの検討」『東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究』九州大学人文科学研究院、145-159頁

藤尾慎一郎（編）1987「唐津市宇木汲田遺跡における1984年度の発掘調査（二）」『九州文化史研究所紀要』第32号、1-13頁

宮本一夫2017『東北アジアの初期農耕と弥生の起源』同成社

宮本一夫2018「弥生時代開始期の実年代再論」『考古学雑誌』第100巻第２号、1-27頁

横山浩一・藤尾慎一郎1986「唐津市宇木汲田遺跡における1984年度調査出土の土器について」『九州文化史研究所紀要』第31号、59-101頁

米田穣・尾嵜大真・大森貴之2019「宇木汲田貝塚から出土した雑穀の炭化頴果における放射性炭素年代」『東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究』九州大学人文科学研究院、160-163頁